

調 査

バレーボール用語の新聞掲載時の種類と頻出度についての考察

小 笠 喜 徳*

要 旨

バレーボールは男子日本代表が2024年オリンピック・パリ大会の出場権を得るなど、注目度が上昇している。バレーボールの一部報道では近年「オポジット」や「レセプション」など、一般には馴染みのないと思われる用語が散見されるようになった。競技用語は時代とともに変わるものではあるが、その変化に伴う一般の理解度低下は、競技普及や人気拡大において大きな課題である。そこで、報道では具体的にどんなバレーボール用語が使われているのか、新聞で使われている用語の種類や使用頻度を調べた。その結果、新旧の用語が混在したり、同意語が同じ記事内で別々に使われていたりするなど、問題点も明らかになった。

新聞記事は紙媒体としてだけでなく各種デジタル報道でもほぼ同じ記事が使われており、ネット報道を通じて多大な影響をもたらすと考えられる。今回は用語の使用頻度調査であるが、今後は読者の理解度調査や、テレビ放送で使われている用語との比較調査を実施することで、バレーボール用語の一般への浸透、さらには競技の普遍化の参考にしたい。

キーワード：バレーボール、競技用語、新聞記事

1. は じ め に

バレーボールの試合をメディアが報じる場合、テレビ中継ではアナウンサーや解説者が言葉によって伝え（テロップ情報などは活字）、新聞や雑誌などは一部のインターネットメディアも含めて活字（文字）により伝えられる。バレーボールには特有の専門用語として「スパイク」や「ブロック」「セッター」などがあり、各メディアでも頻繁に使用される。多くの場合は競技発祥国の米国由来の英語が中心ながら、「強打」「つなぎ」など、日本で独自に発展した用語も存在する。

これらの用語は時代とともに変化しており、例えばかつては「サーブレシーブ」と言われていたプレーを近年では「レセプション」に言い換えるメディアが出現している。報道機関側もこれら用語の変化について分かりにくさを指摘しており、毎日新聞は東京オリンピックを控えた2021年6月に『「レシーブ、トス」もう言わない？ 変わるバレー用語、ポジション名も バレーボール用語の現在』として用語解説を掲載し、「オポジット（旧ライト）」「レセプション（サーブレシーブ）」「セット（トス）」などを例示している。総合スポーツ雑誌 Number も、2023年10月発行の1081号で「コレなら分かる！ 最新バレー用語ガイド」のタイトルで「パイプ攻撃（中央からのバックアタック）」「トランジション（相手攻撃を守ってからの攻撃転換。いわゆる「切り返し」）」など32語を紹介・解説している。

ところが、こうした新旧の用語の一部は、現在でも多くのメディアで混在使用されており、読者や

* 広島経済大学メディアビジネス学部教授

視聴者に混乱を招いている可能性がある。同じ試合の報道において、テレビでは「レセプションが乱れた」と放送しているのに、新聞記事やネット記事では「サーブレシーブが崩れた」とあったり、同じ新聞の同じ記事内に「スパイク」と「アタック」がどちらも掲載されたりしている。

日本バレーボール学会が編集した Volleypedia バレーペディア2012年改訂版によると、アメリカではサーブレシーブが一般的 (p. 38, アメリカ合衆国におけるバレーボール用語の実際) であるとしているものの、同書ではレセプションの表記が多数登場し、国際バレーボール連盟の公式記録に当たる公式帳票にもレセプションが記載されていると紹介している。

一方、同書ではアタックは「相手コートへ返球するプレーの総称」、スパイクは「ジャンプしてボールをたたくように打ち込むアタック」と定義しているが、今回の新聞記事は文脈からアタックとスパイクは同じ意味で使われていると判断した¹⁾。

今回の調査では、各新聞でどのようなバレーボール用語が使われているかを明らかにし、使用頻度の高い用語と、反対に使用頻度の低い用語を集計した。集計結果から新聞におけるバレーボール報道の傾向や、使用用語の矛盾による問題点なども浮かび上がった。

2. 調査方法

2.1 調査期間と媒体、方法

調査期間を2023年4月1日から11月30日と設定した。これは5～10月のバレーボールの国際シーズンを中心に、日本代表のメンバー発表や、シーズン後の総括原稿などがあると想定し、前後1カ月を加えたものである。

調査対象として、広島市に本社を置くブロック紙の「中国新聞」、全国紙の「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」の計4紙を選んだ。

調査方法は、各紙のデータベースを活用した。中国新聞は「中国新聞データベース (日経テレコン)」、朝日新聞は「朝日新聞クロスサーチ」、毎日新聞は「毎索」、読売新聞は「ヨミダス歴史館」を利用した。それぞれ検索キーワードに「バレーボール」、検索対象期間を2023年4月1日～11月30日と設定し、記事検索を実施した。

それぞれのデータベースの検索方法により、検索対象に地域版を含めるかどうか、全国紙の場合は全国数か所の発行本社のどこを選ぶかなど、社によって検索対象や方法が異なったが、それぞれで最大の検索範囲となるように設定した。このため、まったく同じ記事が夕刊と非夕刊配達地域での統合版朝刊に掲載される場合もあったが、この場合は二つの記事としてカウントした。

また、新聞には記事ではなく、記録だけを掲載したコーナーが多くあり、各紙とも相当数のバレーボール記録が収容されていたため、検索該当件数は大きくなった。

これらの記事を印刷して再読しながらバレーボール用語を抽出し、各紙ごとに用語をカウントして集計した。記事本文だけでなく、見出しや写真説明 (キャプション) にも用語が含まれていた場合は一つの用語としてカウントした。

2.2 用語の定義

「バレーボール用語」の定義は、厳密には決められなかった。記事に登場する多くの言葉から筆者の主観で選択した。基本ルールとして、例えば一定数出現した「ミス」や「コート」は、バレーボー

ルだけの用語ではないことから除外した。

また、「サーブレシーブ」など用語の結合によって別の意味に変わる場合は一つの用語とし、「サーブ」と「レシーブ」にはカウントしなかった。「ジャンプサーブ」「ミドルブロッカー」なども同様である。「フェイクセット」は「セット」から独立させた。

また、「ストレート」には勝ち負けとボールのコース、「エース」には大黒柱の選手とサービスエースの略語、「セット」にはセットカウントとトスなど、同意語も多数あるが、前後の文脈から筆者の判断で区別した。

3. 調査結果

3.1 中国新聞

中国新聞では370件の記事がヒットし、バレーボール用語として55語を認めた。中国新聞データベースには地方版の除外指定などの機能がいないため、すべての記事が検索対象となった。同紙の場合、地方版には「ジョイフルスポーツ」のカットが付いたローカルスポーツの記録コーナーがあり、バレーボールの大会記録はすべて検索対象となった。同紙に掲載されたバレーボール用語は頻出順で「セッター (79件)」「ブロック (65件)」「サーブ (48件)」「スパイク (40件)」「アタック (39件)」となった。セッターが最多となった一因として同紙が10月から11月にかけて、広島市出身のミュンヘン五輪金メダリストの故猫田勝敏氏の連載を3部14回にわたって掲載したことが影響していると思われる²⁾。

反対に1件のみの掲載用語は「アウトサイドヒッター」「オポジット」「セッター対角」「ピンチサーバー」「ジャンプサーブ」など19語に達した。

なお、中国新聞は地元のVリーグ男子JTサンダーズ広島の試合を全試合カバーしている。検索期間内にVリーグの試合開催はわずかだったが、他紙に比べてバレーボール関連記事の掲載は多くなっている。

3.2 朝日新聞

朝日新聞のデータベース「朝日新聞クロスサーチ」は、「朝刊」「夕刊」のほか、「本紙」「地域面」の選択肢があり、さらに発行本社別で「東京、大阪、名古屋、西部、北海道」の5発行本社の記事が選べる。このため「東京本社発行夕刊」の記事と、「北海道本社発行朝刊」で同じ記事が掲載される場合があったが、最大の検索対象とするためにすべて含めた。

ヒット数は487件で、用語として抽出できたのは44語だった。頻出用語5傑は「スパイク (47件)」「ブロック (23件)」「サーブ (20件)」「レシーブ (17件)」「セッター (13件)」だった。反対に1件だけの掲載は「スパイカー」「オポジット」「ピンチサーバー」「ジャンプサーブ」「サーブレシーブ」「クイック」など19語であった。

3.3 毎日新聞

毎日新聞のデータベース「毎索」は朝日新聞クロスサーチと同様、朝刊・夕刊、本社別、地方版など選択可能だったが、対象を広げるためにすべて検索対象とした。別刷りや号外も選択対象とする機能もあったが、これらは対象外とした。結果、該当記事は173件となった。

頻出上位5件は「スパイク (60件)」「ブロック (58件)」「セッター (48件)」「トス (33件)」「サー

ブ (27件)」だった。1件だけの掲載は33語で「3枚 (ブロック)」「カンチャン」「二段トス」「ディグ」「リリースサーバー」など。

3.4 読売新聞

読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」は他の全国紙同様、朝夕刊、発行本社別、地方版などが選択可能である。検索結果は1,169件と4紙の中で最大となった。これは同紙が全日本小学生大会や全国都道府県対抗中学大会、全国高等学校総合体育大会 (インターハイ) などを主催しており、各都道府県の予選段階からはほぼすべての地方版でも多数の記事が掲載されていることが要因と思われる。

頻出上位5件は「スパイク (198件)」「サーブ (119件)」「ブロック (90件)」「エース=ポジション (72件)」「アタック (72件)」。1件だけの掲載は12語で「スパイカー」「ドライブサーブ」「エース (を奪う)」「ワンタッチ」「チャンスボール」などだった。

4. 集計結果と特徴

4.1 高頻度用語

各紙を集計した結果、頻出用語の上位10語は下記の表の通りとなった。

掲載バレーボール用語 上位10点
表1 中国新聞

順	用語	件数
①	セッター	79
②	ブロック	65
③	サーブ	48
④	スパイク	40
⑤	アタック	39
⑥	トス	30
⑦	ミドル (ブロkker)	22
⑧	ストレート (勝ち負け)	20
⑨	サービスエース	15
⑩	アタッカー	13
⑩	レシーブ	13

掲載バレーボール用語 上位10点
表2 朝日新聞

順	用語	件数
①	スパイク	47
②	ブロック	23
③	サーブ	20
④	レシーブ	17
⑤	セッター	13
⑥	トス	11
⑦	ネット際	7
⑧	フルセット	6
⑨	エース (ポジション)	5
⑨	拾う (拾って)	5

掲載バレーボール用語 上位10点
表3 毎日新聞

順	用語	件数
①	スパイク	60
②	ブロック	58
③	セッター	48
④	トス	33
⑤	サーブ	27
⑥	レシーブ	25
⑦	強打	23
⑧	エース (ポジション)	21
⑧	アタッカー	21
⑩	リベロ	19

掲載バレーボール用語 上位10点
表4 読売新聞

順	用語	件数
①	スパイク	198
②	サーブ	119
③	ブロック	90
④	エース (ポジション)	72
④	アタック	72
⑥	レシーブ	69
⑦	ストレート (勝ち負け)	41
⑧	トス	31
⑧	セッター	30
⑩	フルセット	26

4紙に共通して最も頻出したのは「スパイク」で3紙が最多、1紙が4番目だった。次いで「ブロック」で3紙が2位、1紙が3位という結果となった。

各紙に掲載されたバレーボール用語は新聞によって頻出度が異なるため、頻出上位10語を1位10点、2位9点…、10位1点と換算して集計すると、1位は「スパイク」、2位「ブロック」で、以下「サーブ」「セッター」「トス」「レシーブ」「エース（位置）」「アタック」「ストレート（勝敗）」との順となった。10位は「ネット際」「フルセット」など多数出現した。

4.2 低頻度用語

調査の結果、各紙の検索期間中に1回しか登場しなかった用語は下記の表の通りである。

1件だけ掲載された用語
表5 中国新聞

レフト
アウトサイドヒッター
ブロッカー
オポジット
セッター対角
オールラウンダー
レシーバー
ピンチサーバー
ジャンプサーブ
ブロックディフェンス
「止めた」
ハンドリング
ツアタック
Z攻撃
アンダーハンド
マッチポイント
セットポイント
ベスト6
アンテナ

1件だけ掲載された用語
表6 朝日新聞

スパイカー
レフト
オポジット
ピンチサーバー
パワーヒッター
オープン
バック
ジャンプサーブ
ブロックアウト
リバウンド
フェイクセット
決める
クイック
サーブレシーブ
一人時間差
ディフェンス
オフェンス
落とさない
テンポ

1件だけ掲載された用語
表7 毎日新聞

スパイカー	ワンタッチ
真ん中	フェイント
中央	たたき込む
ブロッカー	Bクイック
オールラウンダー	ディグ
バレーボーラー	一人時間差
ピンチサーバー	Z攻撃
リリーフサーバー	ファイナルセット
フローターサーブ	タイムアウト
サーブミス	得点率
ブロックシステム	セットカウント
3枚（ブロック）	アタックライン
カンチャン	堅い守備
二段トス	トータルディフェンス
セット	ベスト6
パス	テンポ
対人パス	

1件だけ掲載された用語
表8 読売新聞

スパイカー
オールラウンドプレイヤー
ドライブサーブ
エース（を奪う）
止める（切る）
オーバーハンドパス
アンダーハンドパス
緩急
好守
タッチネット
ワンタッチ
チャンスボール

中国新聞では19語を認めた。「レフト」「アウトサイドヒッター」「オポジット」「ピンチサーバー」などポジションを示す用語が8語、「ジャンプサーブ」「ツアタック」などプレー用語が4語である。

やはり19語の朝日新聞では、「ジャンプサーブ」「ブロックアウト」「フェイクセット」「クイック」などプレーを指す用語が9語で、ポジションは「スパイカー」「レフト」など5語にとどまった。

毎日新聞は31語と4紙では最も多くなった。「3枚（ブロック）」「カンチャン」などは、選手の練習中の声をそのまま記事にしたことにより掲載された³⁾。「ディグ（スパイクレシーブ）」など比較的最近使われ始めた用語も使用している。

読売新聞は12語で最も少なかった。同紙はオポジットやディグなど

比較的新しい用語は掲載されておらず、従来の用語を中心に記事が構成されている。また、「緩急」「好守」「強打」「速攻」など日本語による用語が他紙よりも多く使われていた。

ただ、試合状況によって用語の使用頻度は変わるのは必然である。たとえば「フェイクセット」は朝日新聞では1回だけの出現だった⁴⁾。だが、このプレーが頻発されれば、記事内での使用はさらに増え、反対に一度も使われなければ一度も紙面には載らない結果となったはずで、使用回数が少ないからといって「あまり使われない用語」とは言い難い。

4.3 同意語

用語の変遷にともなって、同じ意味を持つ用語が増えている。下記の事例の多くは以前から併用されていた用語が多数を占めるが、一部では新しい用語と古い用語が混在している例も見受けられた。

4紙に共通して見られた同意語として、「スパイク」と「アタック」、「スパイカー」と「アタッカー」があり、毎日新聞以外の3紙で共通したのは「クイック」と「速攻」である。「トスワーク」と「トス回し」は中国新聞と毎日新聞で見られた。毎日新聞では「スパイクレシーブ」と「ディグ」、「レセプション」と「サーブレシーブ」も使用されていた。

それぞれの同意語の件数は、中国新聞では「スパイク (40件)」と「アタック (39件)」、「アタッカー (13件)」と「スパイカー (8件)」、「クイック (9件)」と「速攻 (3件)」、「トスワーク (5件)」と「トス回し (2件)」だった。

朝日新聞は「スパイク (47件)」と「アタック (3件)」、「アタッカー (4件)」と「スパイカー (1件)」、「クイック (1件)」と「速攻 (3件)」。

毎日新聞は「スパイク (60件)」と「アタック (10件)」、「スパイクレシーブ (2件)」と「ディグ (2件)」、「レセプション (5件)」と「サーブレシーブ (11件)」、「トスワーク (4件)」と「トス回し (2件)」。

読売新聞は「スパイク (198件)」と「アタック (72件)」、「アタッカー (20件)」と「スパイカー (1件)」、「クイック (3件)」と「速攻 (2件)」が確認できた。

新聞記事では、同じ記事に同じ単語が多出すると読みづらさがあるため、執筆者はあえて同意語を使うことがあることは留意する必要がある。しかし、それによって読者の理解度が下がらないことが前提である。

5. おわりに

この調査は新聞各紙に掲載されたバレーボール用語を、各紙ごとにまとめたものである。

使用頻度の高い用語として「スパイク」「ブロック」「サーブ」「セッター」「トス」「レシーブ」「エース (位置)」「アタック」があることが分かった。これらの用語は長期間使われており、中高年者でもなじみのある用語である。また、「拾う」「強打」など日本語の用語として定着した用語もよく使われていた。

さらに「ミドルブロッカー」「バックアタック」「アウトサイドヒッター」など、和訳すれば意味が分かりやすい用語は一定数使われており、読者の理解度も低くはないと思われる。

前出した比較的新しいバレーボール用語を解説した新聞記事や雑誌記事で紹介された用語には「レセプション」「ディグ」「トランジション」「Aパス」「ブレイク」などがあったが、新聞紙上での使用

は限定的で、ほとんどの紙面では使われていなかった。これらの用語はすでにテレビ放送では頻繁に使われているにもかかわらず、新聞報道に導入されていないのは、カタカナ語で用語が長くなることから文字数に制限のある新聞では使いにくく、読者の理解もまだ進んでいないとの判断があると推察される。

同意語の存在は大きな問題である。「スパイク」と「アタック」、「クイック」と「速攻」などは以前から併用されており、大きな混乱を招いている様子は見られない。しかし、本来は同じ競技で同じプレーを指す用語に同意語があるのは、読者の混乱を招きかねない。

毎日新聞は比較的新しい用語を使っており、「サーブレシーブ」と「レセプション」、「スパイクレシーブ」と「ディグ」が確認できた。先進的な試みと感ずるものの、仮に「日本は安定したレセプションとリベロの好ディグが勝利を引き寄せた」という記事が掲載された場合、読者の理解度はいかがであろうか。分かりやすさを基本とする新聞記事において、専門用語の使用はその用語の浸透度を見極めてから踏み切るべきであろう。

共同通信加盟社の記者が記事執筆の参考とする新聞用字用語集「記者ハンドブック」（共同通信社刊）には、バレーボール用語としては、クイック、コンビバレー、ジャンプサーブ、スパイク、セッター、センターなど12語しか掲載されていない。同書にはスポーツ全般用語としてアタック、サービスエース、ジュース、トスなどの記述もあるが、「オポジット」「レセプション」等の比較的新しい用語は記載されていない。新用語の使用は新聞各社の判断ながら、例えば地方版での県大会レベルの試合を取材するのはスポーツ専門記者ではなく一般記者が取材執筆することがほとんどである。ここで各社が明確な用語の使用基準を定めなければ、スポーツ面では新用語、地方版では旧用語が使われるなど、統一性のない構成になりかねない。

バレーボールの普及や人気醸成のためには、広く競技理解が進むことが求められる。今回の調査で新聞のバレーボール用語使用の傾向の一端は明らかになったが、今後は新聞よりも新しい用語を多用しているテレビ放送との比較や、各種用語の読者の理解度調査も必要と感じられた。

注

- 1) 毎日新聞2023年5月4日付東京朝刊13ページ 黒鷲旗全日本男女選抜バレーボール大会第3日 さえる大竹、バナ導く「角度のあるスパイクを決めた。～豪快なアタックで着実に加点」、中国新聞2023年10月27日付18ページ アタック精度に磨き JT 広島あすからジェイテクト2連戦「スイングやスパイクの入り方など細かいところのタイミングの合わせ方が課題とアタックの制度向上に励む」など、多数あり。
日本バレーボール学会設立15周年記念出版 Volleypedia バレーベディア（日本文化出版）2012年改訂版 10ページ chapter1アタックに記載されている。
- 2) 中国新聞連載「セッター猫田勝敏の魂」2023年10月24日付15ページ～2023年11月28日付14ページまで 3部14回連載。
- 3) 毎日新聞2023年5月6日付東京朝刊16ページ 黒鷲旗全日本男女選抜バレーボール大会第5日 男子、王者激突「相手が3枚ブロックで対抗しても」、毎日新聞2023年10月17日付東京朝刊12ページ「つながる、男子バレーブロック弱点割り切り後衛レシーバーに託す」「カンチャン（ブロック2人の間）を抜かれることは悪とされていたが」など。
- 4) 朝日新聞2023年6月4日付朝刊グローブ3面 グローブ280号〈スポーツ×(データ+AI)=進化?〉〈視点〉取材した記者が考えた「フェイクセットが脚光を浴びた」。

参考文献

「毎日新聞」2021年6月15日付東京朝刊17ページ『月刊東京五輪：「レシーブ、トス」もう言わない？ 変わるバレー

用語, ポジション名も バレーボール用語の現在』

「Number1081」(週刊文春2023年10月12日臨時増刊) 54, 55ページ「これなら分かる! 最新バレー用語ガイド」
「日刊スポーツ WEB」2021年7月25日配信(2018年9月5日の再配信)「復刻バレーボールテレビ観戦応援するための現代用語教科書」

「日本バレーボール学会設立15周年記念出版 Volleypedia バレーペディア」(日本文化出版)2012年改訂版

「記者ハンドブック新聞用字用語集」(一般社団法人共同通信社)第14版(2022年3月15日発行)715~719ページ
運動用語仮名表記

「コーチングバレーボール基礎編」(大修館書店)